

高山植生の変化を通して見たライチョウの将来

本州中部山岳高山帯を代表する生きものとして、皆さんが最初に思い浮かべるのはライチョウではないでしょうか。種ライチョウは北半球北部のツンドラ地帯に広く分布し、最も寒い気候に適応したライチョウ類として知られ、狩猟鳥にもなっています。しかし、氷期に南に分布拡大し、その後の氷河の後退により温帯の高山帯に取り残された集団がいます。その一つが日本のライチョウで、世界最南端の集団です。近年、南アルプス北部の白根三山におけるなわばり数の急減などが生じており、1980年代におよそ3000羽と推定されていたのが、現在ではそれよりもかなり少なくなっているのではないかとされています。そのため、2012年の環境省レッドリスト改訂により絶滅危惧IB類にランクアップされるとともに、保護増殖事業計画が策定されました。2015年には乗鞍岳で産卵期あるいは抱卵期のライチョウの巣から採卵され、上野動物園などで域外飼育がスタートしています。



図1 ライチョウの生息環境
(北アルプス後立山連峰爺ヶ岳南峰)

現在、南アルプスにおけるニホンジカの植生被害やキツネ等低山帯の捕食動物の高山帯への侵入等が問題となっていますが、長期的には地球温暖化の問題が逃げ場のない高山帯の生きものにとって重要になると考えられます。そこで、研究所では森林総合研究所との共同で、気候変動がライチョウの分布に

どのような影響を及ぼすかについて研究をスタートさせ、この程成果がまとまりましたので、紙面を借りてお伝えします。



図2 登山道沿いに餌をついばむライチョウの幼鳥
(2015年8月 爺ヶ岳中峰)

日本のライチョウは、厳冬期を除いて高山帯で暮らします。背の低いハイマツ内で営巣し、その周りにあるツツジ科の矮性低木の風衝地や雪田植生のお花畑などを餌場として利用します。つまり、高山植生に強く依存した生活をします。そこで、気象や地形に強く影響を受ける高山植生が、気候変動の影響により将来どのように分布するかを予測することで、ライチョウの分布がどうなるかを予測しました。調査は詳細な植生データやライチョウデータなどがそろそろ北アルプス中南部でおこなわれました。その予測結果は、驚くべきもので2081年～2100年には、潜在的にライチョウの生息に適した場所は高山植物群落の面積率低下に伴い、現在の約1%以下になるというものでした。

現在、ライチョウの生息全域を対象とした、潜在的な生息域の変化予測を進めています。その結果を、今後の保護増殖事業における、保全対象地域の優先順位付けや保全事業内容の策定等の有用な資料として活用してもらえるようにしていきたいと考えています。
(堀田昌伸)